「幼児教育の源流」～子どもたちのパワーに未来を託す～

学校法人島田学園　理事長　島　田　教　明

私は、昨年１０月に「ようこそ先輩！」という講演を、母校の中関小学校で６年生を対象に行いました。同校とは教育後援会や学校運営協議会の会長として深くかかわっており、この１０年間、講演を続けています。児童心理治療施設、保育園や幼稚園での教育に携わった体験、県会議員として取り組んでいる施策など、幅広く子どもたちに伝えていますが、いつも熱心に聴いてくれるので、ついつい力が入る時間でもあります。

「おとなになったら防府に戻ってきて、防府のために働きたい」、「島田さんのように未来を考えて働くのはすごいと思った」、「建て替わる医療センターで外科医になって働きたい」など、本当にうれしい感想を毎回いただいています。

その中でも、「みほり学園の生徒さんは、私と同じ歳なのに　〈R7.12.17　しまたのりあきブログから〉大変な経験をしています。今、私は両親と暮らしていて本当に幸せです。」といった感想文が特に多くあります。私がこの施設で出会った６年生のお子さんの話を共感的に聞いてくれているんだなあと感じる感想です。

児童心理治療施設は、家庭や学校等での人間関係のゆがみ等により、情緒的に不安定になっている小・中学生が、集団生活を通して心理療法、生活指導などにより不適応行動の改善を図る施設です。私が出会った女の子は運動神経がよく、私が指導していました中学生のバレー部に入ってバレーをしていました。バレーの練習は夕食後に体育館でしていました。練習後、体育館に施錠して出るときにその子と二人になりました。施設の周りにほとんど建物はなく、真っ暗な運動場越しにいつの間にかできた家に灯りがついていました。私が思わず、「明るいね」と言うと、しばらくの沈黙の後、「私はあの灯りが嫌いなんよ。暖かそうに見えるやろ。」と答えました。

その子は中学生になるときに、家に帰りました。帰ったというよりも、帰宅を嫌がる本人を説得して家に帰したという方が正しいかもしれません。その後、連絡がありませんでしたが、高校生になってから手紙が届きました。「高校では何とかやっています」という短い手紙にこの子の３年間が想像されました。「この子が私の先生です」と、子どもたちに話しました。家から離れて暮らす１２歳の子どもの心、灯りを見たときの気持ち、その後の人生、心に寄り添うということの難しさと大切さを感じさせられた出会いです。このことを母校の子どもたちは他人事ではなく自分事として共感してくれました。

共感とは他者の感情を理解し共有する能力であり、集団生活への適応、人間関係の構築といった社会性を育成する上で重要な役割を果たします。最近の若者は、他者に興味がなく、人の気持ちが理解できない、さらには本音を語らないと言われることがあります。しかし、本園の子どもたちを見ている限りそんなことはないように思います。幼児期の素直な育ちはどこで失われたのでしょうか。

保育室の中で遊んでいる幼児がいます。友だちの雰囲気が日頃と少し違う、例えば、笑顔がない、言葉が少ないなどの変化を感じると、「どうしたの、元気出して」、「困っているの、手伝おうか」など、やさしく声をかけます。その瞬間、２人の間にあたたかな雰囲気が伝わります。それが共感であり、互いの気持ちを分かりあえたという共感が安心感を生みます。

この共感のもとになるのが感性です。美しい景色を前にすると立ちつくす、素敵な演奏に胸

が締め付けられ自然に涙が出ることがあります。このように外からの刺激に心が強く揺り動かされるのが感性の働きです。感性は経験によって育まれるものであり、何に対して反応するか、その種類や範囲は人により異なります。幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培うものであり、感性を磨き共感する力を高めることが、その後の豊かな人生につながっていくのです。

私は、今、様々な機会に防府市出身の第１１代台湾総督の上山満之進翁のお話をしています。翁は晩年、郷土の人材育成のためにと私財を投げうって「三哲文庫（現防府市立図書館）」を設立されました。そこに展示されていた台湾の陳澄波画伯が描いた「東台湾臨海道路」が一時期行方不明になっていました。紆余曲折を経て発見され、現在、防府市において大切に保存しています。その間、私も何度も台湾を訪ね、関係者の方々と交流してきました。その過程で、翁と台湾の方々の結びつきの深さに驚かされました。

翁は庄屋格の家に生まれ、幼児期から頭がよく、将来を嘱望されるほどでしたが、御父上からは、「誰に対しても同じように接する」ことの大切さを訓示されていました。御父上が早くに亡くなられ、経済的に困窮し苦学して東京帝大を卒業され、官僚となり熊本県知事などを経て貴族院議員、第 11 代台湾総督になられました。翁はどんなに立派になられても、感性豊かに人々の心に寄り添い、誰に対しても平等に接せられました。その人間性の基礎である豊かな感性は幼児期の子育て・教育の中で育まれたものです。

当時、台湾は日本の領土になっており、現地の人々との間に課題がありました。それを解決できるのは翁しかいないと総督に抜擢されました。現地では、台湾の人々を大切にし、経済、教育、自然保護の振興等に尽力しました。前述の絵は、台湾の人々に惜しまれながら翁が総督を退官する際に、記念として陳澄波画伯に依頼して描いてもらったものです。現在、台湾の人々に親日家の方が多く、防府市や山口県との交流が盛んです。約 100 年前の翁の足跡を辿る中で、今を生きる私たちの生きざまが、子や孫の世代につながっていくことを改めて考えさせられます。

昨年、半年以上をかけて本館の補修工事をしました。外壁の亀裂の補修と色の塗り替え、トイレの洋式化、廊下・階段や保育室内の床の張替え、ホワイトボードと手洗いシンクの取替などの工事が完成間近い１２月に状況を視察しました。各クラスを回って、子どもたちに会うことも楽しみの一つです。サークルタイムをしていたクラスの担任の先生に代わってもらい、久しぶりに子どもたちとお話しを楽しみました。写真のように子どもたちと輪になってお互いの表情を見ながら話を展開していく、幼児教育の原点とも言える活動です。「話す力」はもとより、「聞く力」をも育てることにポイントを置いた活動です。自分の言いたいことだけを言う人が多い昨今の風潮がありますが、こうした地道な活動を通じて、相手を共感的に理解しようと互いに相手の話に耳を傾ける「聞く力」が育っていくものです。

〈サークルタイム〉

昨年１２月の音楽会、０・１歳児はステージで保護者の皆様と一緒に歌ったり踊ったり、２歳児は発表が終わった後、手招きに応じて観覧席の保護者の皆様のもとに駆け寄っていました。笑顔あふれる温かな空気感が、子育てには必須です。子どもたちの感性を育てるということは、こういった些細な日常の体験の積み重ねが大切です。

〈音楽会〉

幼児教育と義務教育の連携の重要性が言われています。ややもすると学力向上に目が行きがちですが、子どもたちの感性を育てることを大切にする幼児教育が義務教育以降にも引き継がれ、楽しい学校生活や豊かな人生につながっていくことを期待しています。